論　文　ニダバ (*Nidaba*) 31(2002), 83-92

日・韓両語の「青：파랑」による比喩的色彩表現

權　寧　成

1．はじめに

人間はある色彩（語）を目にしたり、耳にしたりした際、その色彩と関わるさまざまの連想を生む。たとえば、blue からは、冷淡・平静とか海・空を思い浮かべたり、冷たさを感じたりする。色彩からの連想・象徴はその色彩の含有している象徴的意味や感性的意味によるものである（大山 1994）。

色彩語は言語学者が好んで取り上げる分野で、各言語との対照研究もかなり進んでいるという柴田（1982）の指摘がある。しかし、日・韓両語の色彩語による言語表現（比喩的色彩表現）の異同についてはそれほど言及されてこなかった。

本稿ではまず、日・韓共に古くから green と意味的、かつ色相的に混同されてきた blue（青：파랑）について考察を進めていくこととする。韓国語色彩語「파랑[1]（青）」は古くから自然のなかでも、とくに、松の青々とした姿をよく修飾してきた面がある。このような表現的慣習が意味的にはどのように反映されているかを、日本語色彩語「青」との対照の観点から検討していきたい。

2．分析対象とその範囲

本稿では、日・韓両語の色彩語「青：파랑」による比喩表現の異同を明らかにしていくため、色彩語を含んだ複合語・慣用表現を主な分析対象としていく[2]。

語彙研究（方言研究）の重要な課題として、個々の語詞における比喩表現と慣用表現の把握の必要性が指摘されており、個々の表現レベルにおいてこそ、生活形態や発想の違いによる“地域性”は、より顕著なものとして把握されることになる（町 2000）とも述べられている。

須賀川（1999）は色彩語の意義素は色相そのもの（→中心的意味、hue）であり、それ以外は異意素（→比喩的意味）といったように分類している。日・韓両語の色彩語「青：파랑」の中心的意味は、それぞれの色相（hue）とする。

本稿での分析対象の範囲は、色彩語の入った個々の言語表現（複合語・慣用表現）が、色彩を表す物理的現象（hue）以外の用法として使われるものに限る。一方、色彩といった物理的現象のみを表しているものにおいても、日・韓両語の認識の違い（表現の違い）が認められる色彩表現は採用する。

3.「青」

3－1　発生背景（語源）

日本語色彩語「青（暗）」は、もともと明暗の相違によって、「赤（明）」と対立している色彩語であり（「青；漠」と「白；顕」との対立もあり得るが、「青白い」といった組み合わせから考えたとき、両色が対立関係にあるとは認められない）、明るいほうの色を表す「赤」に対して、暗さを指す色として使われはじめた（柴田 1982）とされている。

3－2　複合語にみる比喩的色彩表現

（1）青公卿　（2）青侍　（3）青書生　（4）青女房　（5）青二才
（6）青春[3]　（7）青息　（8）青空　（9）青瓢箪　（10）青菜

以上は辞書（『広辞苑第４版』（1996））に載っている「青」の入った複合語であるが（意味的に類似した類のものは一部省略する。以下同様）、その表現領域は次のようにまとめられよう。

①身分が低い：(1)(2)(4)　②未熟さ：(3)(5)　③若さ：(3)~(6)
④ため息(苦しみ/悲しみ)：(7)　⑤晴れる・澄んでいる[4]：(8)
⑥蒼白だ：(9)　⑦若々しい（生命力）：(10)

とくに「青」が「身分が低い（者）」といった意味を持つ色彩表現として用いられている点は注目を引く。なぜ、身分の低い者を形容するための複合語に色彩語「青」が用いられているのだろうか。

これは、色彩「青」からの連想による表現法・発想法なのではなかろうか。植物の持つ「青」という色彩そのものからの認識、つまり、熟していない木の実は青いという認識から、植物（の実）の未成熟さのみでなく、人格・学問の未成熟さ（未完成）にまで表しているということである。色彩語「青」は「人格・学問の未成熟さ（未完成）」といった表現領域を表すのみでなく、さらに「身分の低い者」を喩えるための恰好の色彩語だったとも考えられよう。

以上、「青」の入った複合語では、「未熟さ」「若さ」「身分が低い」を表すものが多いことが分かった。

一方、「青息」は「苦しんだり、悲しんだりする時に出すため息」のことを意味するが、これについては、以下で言及していくことにする。

３－３　慣用表現にみる比喩的色彩表現

(1)青い息を吐く (2)柿が赤くなれば医者は青くなる　(3)青筋を立てる

(4)嘴が青い (5)けつが青い　(6)青き眼 (7)青くなる　(8)青山ひたすら青し

以上は『ことわざ大辞典』(1982) に載っている「青」の入った慣用表現であるが、その表現領域は次のようにまとめられよう。

①ため息(苦しみ/悲しみ):(1) ②困る:(2) ③怒る/興奮:(3) ④若くて未熟だ:(4)(5)

⑤澄んでいる:(6)　⑥青ざめる/蒼白だ:(7)　⑦不変性:(8)

また、同辞典には載っていないものの、以下のような比喩的色彩表現は一般的な言い回しであろう。

(9)青いリンゴ (⑧熟していないリンゴ)　(10)青い空 (⑨晴れた空)

普段「青筋」と言えば、「青色の筋。とくに、皮膚の上から見える静脈」のことを指す。また、激昂すると、静脈が怒張してはっきり現れるので (認知言語学で言うイメージスキーマ[5])、「青筋を立てる」と言えば、「激しく怒る」という感情を喩えて言う比喩的色彩表現となる。

これ (3) と共に、(2)(4)(5)(7)における色彩語「青」の使われかたは、色彩「青」からのイメージスキーマによる表現法と言えよう。つまり、色彩語「青」を用いて、ある概念を比喩ル[6]心理は、日本人の色彩「青」に対する認識結果の現れである。

こういった認識結果・発想法による比喩的色彩表現(果実などの未熟なものが青いところから、人柄やすることが未熟である) は、色彩「青」のイメージから自然に意味づけされた表現法であるため、以下で韓国語と対照してみても、相互に類似した側面 (動機づけ、意味づけから見て) を有する場合が多いのが分かる。

しかし、韓国語では用例(4)(5)のような表現領域 (→未熟だ) に相当する比喩的色彩表現はそれほど見られない。注目すべきは、韓国語色彩語「파랑 (青)」にも「未熟だ」という意味合いは有するという点である。しかし、韓国語色彩語「파랑 (青)」を使って「未熟だ」といった表現領域を表す比喩的色彩表現はそれほど発達していないようである。

これに対し、日本語色彩語「青」は「未熟だ」といった表現領域を持つ比喩的色彩表現が発達している。

(11)<u>青い</u>ことを言う (→<u>유치한</u> 소리를 하다) (12)技が<u>青い</u> (→기술이 <u>미숙하다</u>)

上記の「未熟だ」を意味する日本語「青い」が韓国語ではそのまま「푸르다 (青い)」との入れ替えは不可能である。

(11')*파란 소리를 하다/푸른 소리를 하다 (12')*기술이 푸르다/파랗다

例文(11)(12)における日本語色彩語「青い」は、韓国語文ではそれぞれ(11)「(유치한) 幼稚な」、(12)「(미숙하다) 未熟だ」のように、色彩語は使わずに直接的な表現法を取らなければならない。

結局、韓国語色彩語「파랑 (青)」は「若過ぎる」という意味合いが強いので、「経験

が浅い/未熟だ」という意味用法をも内包されていると考えられるのではないだろうか。

また、上記の(1)(2)といった色彩表現における「青」のような使われかた（ため息・困る）も、韓国語には見られない。韓国語では、「苦しんだり、悲しんだりする時に出すため息」のことを形容する際には、色彩語「푸르다（青い）」のみならず、ほかの色彩語も用いられない。これらの用例における日本語色彩語「青い」は韓国語色彩語「푸르다（青い）」への直訳が不可能である。色彩語は使われずに直接的な表現法を取らなければならない。

(1)青い息を吐く（→한숨을 짓다）　(1')*푸른 숨을 짓다/파란 숨을 짓다

(2)柿が赤くなれば医者は青くなる（→곤란해진다）　(2')*푸르게(파랗게) 되다

以上、韓国語では「苦しんだり、悲しんだりする時に出すため息」「困る」といった表現領域を表すにあたって、色彩語「푸르다（青い）」が使われるといった発想法・表現法は持たないようである。

３－４　新語[7]にみる比喩的色彩表現

青年　青少年　青写真　青信号　青空教室　青空市場　青空駐車　青い鳥　青い目

上記の例を見ていくと、新語には既存の「青」による表現領域のなかで、とくに、肯定的イメージが取り立てられていると言えよう。もちろん「青写真（← blue　print)」「青信号（← green light)」は、英語から訳する際、「青」が用いられたと考えられるが、現在は、前者は本来の意味から転じて、「将来の姿・未来図・計画」、後者は「行先が安全であるしるし」といった意味としてよく使われている。ここでの「青」からは両方共に「明るい・良い（予感がする)」といったイメージが得られる。「明るい」のイメージが見られる表現として、また「青い鳥」が挙げられる。「青い鳥」は青を幸福のモチーブ・カラーにした外国の小説『青い鳥』をイメージした表現として、次のような言い回しをしばしば耳にする。「青い鳥が幸せを持ってくるかも」。

このような表現が日本語として定着し、日常生活での言い回しとして可能となったということは、そのイメージが既に日本人の脳裏に焼き付いているということを示唆している。だからといって、他国（他文化）における色彩語による言語表現が、そのまま日本語として受け入れられるわけではない。たとえば、英語「blue」は「わいせつ・下品」というイメージがあり、「blue　film：ポルノ映画」という色彩表現も存在する。しかし、日本語では「ピンク」映画と言う。英語「pink」にはこういったイメージは含まれていない。このことは、その色彩語に対する情緒が違うからであろう。

「青年」という語は今日よく使われているが、その由来に関しては諸説がある。加藤/森下（1988）によると、明治初期に「青年」という語が用いられていたこと（明治 7 年)、英語「youth」の訳として「青年」が用いられていたこと（明治 9 年）が確認されているということである。佐藤（1977）は、中国で「青年」という名詞を用いた時は、「未熟な

者」という語感があったのではないかと考える反面、日本では「青雲」あるいは「青春」を連想し、「若々しい」という感じを抱いたので、よほどニュアンスが違っていたのではないかと述べている。

一方、「青い目をした助っ人」といった言い回しをプロ野球中継などでしばしば耳にする。日本人が西洋人と接する以前では、「青き眼」「青眼」といえば、概略「澄んでいる目」「好意的な目つき」の意味で、西洋人のことを意味する色彩表現ではなかった。

しかし、「青い目をした助っ人」における「青い目」は、西洋人の野球選手のことを喩えて言うものである（青き眼・青眼とは「青」の捉えかたが異なっている)。

すべての西洋人が青い目であるわけではないが、黒い目の日本人にとって、青い目は西洋人のプロトタイプとして認識されていたのである。「青い目をした助っ人」といった色彩表現に見られる発想法は韓国語にも適用される。

4.「파랑」

4－1　発生背景（語源）

韓国語の固有色彩語「푸르다（파랑の形容詞形)」の語源は、「풀（草)」であり、「풀（草)」から「풀/pul/＋다/ta/」という造語過程を経て形成された（全 1941)。こういった発生背景によって、韓国語色彩語「푸르다」は、色相的に最初から blue よりは green を表していたと考えられる。

4－2　複合語にみる比喩的色彩表現

韓国語の色彩語は日本語とは違って、他の語と結びつく場合、とくに複合語を作る際には、固有色彩語は積極的に使われず、主に漢語色彩語が用いられる。

(1)청천(青天) (2)청춘(青春) (3)청상(若い未亡人) (4)파랑새(青い鳥)

以上は辞書に載っている複合語であるが、比喩的意味を持つものは、日本語色彩語「青」に比べ量的に相当少ない。その表現領域は次のようにまとめられよう。

①晴れる/澄んでいる:(1)　②若い:(2)(3)　③良い前兆/希望:(4)

以上、韓国語色彩語「푸르다(青い)」の入った複合語では、量的にも少ないためか、その表現領域も日本語に比べると、それほど多岐ではない。韓国語では固有語（日本語の場合は和語）は漢語に比べ比較的造語力が乏しいが、色彩語を含んだ造語においても、こういった傾向は、とくに著しく観察された。したがって、比喩表現もそれほど豊かでないと推測される。

4－3　慣用表現にみる比喩的色彩表現

(1)겨울이 되어야 솔이 푸른 줄 안다(困難にあってこそ初めてその人、あるいは

物の値ちが分かってくる）(2)푸른 양반（権力を振り回す、また気勢の鋭い人）

(3)서슬이 퍼렇다/푸르다（気勢が鋭い/剣幕だ）

以上は『우리말속담큰사전』(1983）に載っている韓国語色彩語「푸르다」の入った慣用表現であるが、その表現領域は次のようにまとめられよう。

①永遠/不変（→高い価値）:(1) ②(権力を持つ人の)剣幕さ/気勢が鋭い(人):(2)(3)

上記の色彩表現は日本語色彩語「青」による色彩表現では見られないものである。

とくに、上記の（１）における韓国語色彩語「푸르다」は、「永遠/不変」といった表現領域を持つので、表面的には日本語色彩語「青」による比喩的色彩表現に見られる「青山ひたすら青し[8]」と類似した使われかた（→不変）として認識されよう。しかし、韓国では色彩語「푸르다」から「永遠/不変」といった概念を越えて、さらに「高い価値（理想)」といった表現領域（情緒）へと拡大・発展していったようである。これについては、以下で詳細に論じていくものとする。

一方、同辞典には載っていないものの、以下のような色彩表現は韓国語色彩語「푸르다」を使った一般的な言い回しであろう。

(4)새파란 잔디（青々とした芝生）(5)저 사과는 아직 파랗다（あのリンゴはまだ青い）

(6)새파랗게 젊다(若過ぎる→未熟だ）(7)새파란 애송이（経験の浅いやつ）

(8)안색이 파랗다(顔色が青い）(9)시퍼렇게 핏대를 세우다(青筋を立てる）

(10)푸른 하늘/새파란 하늘（晴れた空）

③若々しい(生命力):(4)　④熟していない:(5)　⑤若過ぎる/未熟だ:(6)(7)

⑥青白い/蒼白だ:(8)　⑦怒る/興奮:(9)　⑧晴れる:(10)

これらの色彩表現（4~10）は日本語色彩語「青」によるものと類似した発想から生まれてきたと言えよう。ただし、韓国語色彩語「푸르다」の場合は、「未熟だ」といった表現領域を表す表現法が日本語色彩語「青」に比べてそれほど活発でないということが上記の３－３での対照分析によって認められた。

日・韓両民族にとって、色彩語「青：파랑」からの比喩ル心（あるいは発想法）は類似性を有するとしても、両国の社会・文化的状況によって、比喩ル世界の広がりは異なり得るということも考えられよう。言語の意味というものを考える場合、とくに言語の意味と現実の世界との関係を考える場合、その恰好の材料を提供するものとして色彩語彙が取り上げられることが多い（山口 1993）からである。

以下では、韓国語色彩語「푸르다」による比喩的色彩表現は、日本語色彩語「青い」とどのような点で異なっているかを、まずその背景から検討していく。

上記の（１）における韓国語色彩語「푸르다」は韓国民族の独特の価値観（情緒・心情）を喩えるための恰好の色彩語の１つであることに間違いないだろう。韓国語色彩語「푸르다」は、古くから様々な自然物のなかでも、主に「松・竹」を形容し、「永遠・不変」「高い理想」「高潔な品位」などといった情緒を表すためによく使われてきたという特徴があ

る[9]。また、まっすぐに伸びている竹の様子は「裏切らない」というイメージとも結ばれた。したがって、「푸르다」は古くから竹をよく修飾し、「操・節義」といった情緒をも表すようになった。

上記の（1）は、そういった自然環境から生まれてきた韓国独特の比喩的色彩表現（ことわざ）である。これは、松の色が帯びているイメージを用いた表現である。松はいつも青い。したがって、「푸르다(青い)」は「高い価値（冬になっても、その青さを保っているので)」をも意味（抽象的観念）するようになったと推測される。

こういった背景のためか、韓国語色彩語「푸르다」には日本語色彩語「青い」には見られない独特の比喩的色彩表現が多数存在する。

(11)푸른 꿈(若さの持つ進取的理想)　(12)푸른 기운(若さの持つ元気)
(13)푸른 기상(若さの持つ進取の気性)　(14)푸른 혈기(若さの持つ情熱)
(15)푸른 힘(若さの持つはつらつたる力)
(11')*青い夢（12')*青い元気（13')*青い気性（14')*青い情熱（15')*青い力

上記は「푸르다」に対する韓国人の情緒が内在している比喩的色彩表現だと言える。上記の慣用表現を見ると、「푸르다」には「(比喩的に用いられて）はつらつとしている/進取的/高い理想」という表現領域を表す。

これらの比喩的色彩表現では色彩語「푸르다」」がいずれも手に取れない抽象的かつ観念的意味を持つ名詞（夢、元気、気性、情熱、力）を修飾しており、なお、独特の抽象的かつ観念的意味を有する。これらの比喩的色彩語から、韓国語色彩語「푸르다」は、単に色彩を表わしているのではなく、韓国民族の独自の情緒が反映されていると言える。

室山(1998：389)は、「すべての民族が、身のまわりの環境を同じように見たり、同じ角度から同じ詳しさで認識しているわけではなく、自分たちの知的関心や実用性に応じて認識しており、それが一々の民族の言語、とりわけ生活語彙に色濃く反映していると考えるのである」(傍点は筆者)と述べている。つまり、当時の人々の生き方(とくに、節義/操を大事にしていた環境/知的関心)を喩えるため、「푸르다」は恰好の表現材料として使われていたと考えられるのである。

これに対し、日本語では「青山ひたすら青し」といった比喩的色彩表現（中国の影響）があるものの、韓国語色彩語「파랑（青)」のような表現領域までには拡大されていない。

4－4　新語にみる比喩的色彩表現

(1)청신호＝파란불(青信号)（2)청사진(青写真)（3)청년(青年)（4)청소년（青少年）

漢語色彩語の入った「청신호（青信号)、청사진（青写真)」の場合には、日本語のれと同じ意味として使われている。韓国は日本と同様、漢字文化圏であるため、とくに「青写真（← blue print)」「青信号（← green light)」は、英語から訳される際、「青」が用いられたと考えられる。

一方、翻訳の際、日本語の影響があったのではないか、といった点も排除できないだろう。韓國は 19 世紀末（当時は朝鮮）から近代化していく過程において、既に西洋文化との接触が多かった日本の影響を強く受けてきた。もちろん言語的な影響も否定できない。韓国語にそれまで存在していなかった概念は、同じ漢字文化圏の中国・日本で使われていた漢字を利用し、そのまま取り入れたと考えられる。このことから、日・韓両語における「청년：青年」「청소년：青少年」「청신호：青信号」「청사진：青写真」の意味的な違いは、ほとんど見られないのである。

5．日・韓の近・現代における比喩的色彩表現の特徴

近・現代に入って使われ始めたと思われる、日・韓両語の「青：파랑」による比喩的色彩表現の特徴は、異文化の影響によるものが多いという点であろう。

日本では西洋文化の移入によって、あるいは英語からの翻訳によって、新しい比喩的色彩表現が生まれてきた（青写真← blue print、青信号← green light、青年← youth）。また、同じ漢字文化圏である韓国では、英語からの日本語訳がそのまま受け入れられてきた可能性が高い。たとえば、４－４で挙げたものである（청년←青年、청소년←青少年、청사진←青写真、청신호←青信号）。これらも語は日本語の「青」を音読みでなく、漢字という文字を介して受け入れたのであり、漢字文化圏ならではの受け入れかたである[10]。

ただし、ここで注目せざるを得ない点としては、他国（他文化）の比喩的色彩表現が、そのまま自国語の比喩的色彩表現として受け入れられるわけではないということである。前述したように、ある色彩語に対する情緒が自国文化とまったくかけ離れている場合である（たとえば、ポルノ映画を意味する英語「blue film」が日本語では「ピンク映画」と言われている）。ちなみに、韓国では「도색영화（桃色映画）」と言われている。

6．おわりに

以上、本稿では、日・韓両語の「青：파랑」による比喩的色彩表現を取り上げ、その表現領域の異同を詳細に検討してきた。

その結果、日・韓両語の「青：파랑」が用いられる表現領域では、表面的な使われかたの相違点はそれほど著しくないということが分かる。むしろ、表現上の類似点が目立つ[11]。とくに、「青：파랑」という色そのものからの認識、つまり、熟していない木の実は青いという認識から、植物（の実）の未成熟さのみでなく、人間（人格・学問）の未成熟さ（未完成）にまで表しているということである。このことから、色彩語の意味範疇・表現領域は言語によって決められるものではないという点が言えよう。ものに対する基本的認識・発想が類似していれば、そこから生まれてくる言語表現（比喩的色彩表現）も類似性を見

せる。

しかしながら、日・韓両語において、類似した色彩領域を持つ色彩語「青：파랑」が示すものであっても、両国の人々がどういう情緒を持っているかによって、かつ文化・社会的背景の違いによって生まれてくる比喩的色彩表現はそれぞれ異なり、なお、表現領域も相対的に決まってくると言えよう。

韓国語色彩語「파랑（青）」による比喩的色彩表現の分析結果を考え合わせてみると、韓国語色彩語「파랑（青）」は「永遠・不変」「高い理想」「操」といった価値観・情緒を簡潔にかつ圧縮した言語で描くための格好の色彩語であることには議論の余地がないと考えられる。これは儒教的価値観に基づいた韓国民族の独自の発想による表現法だからである[12]。

これに反し、日本語色彩語「青」には儒教的価値観の認められる比喩的色彩表現は見られなかった。ただし、日本語色彩語「青」は「未熟さ」を意味する比喩的色彩表現が韓国語色彩語「파랑（青）」に比べ相当発達しているという特徴が確かめられた。

注

1 韓国語色彩語「파랑（青）」の形容詞形は「푸르다」である。

2 本稿の用例は、日本語の場合は、『広辞苑第４版』(1996)、『ことわざ大辞典』(1982)を、韓国語の場合は、『우리말 큰사전』(1994) 어문각、『국어 대사전』(1997) 民衆書林、『우리말속담큰사전』(1983) 서문당を用いる。筆者が日常生活で採取したものも扱う。意味的に類似した比喩的色彩表現が多数存在する場合には、一部の用例は省略する。

3 ここの青春と、以下の青眼・青年・青少年等における「青」は、「アオ」でなく音読み「セイ」であるが、区別しないこととする（本研究の目的に影響はない)。ただし、音読み「セイ」による用例を本稿で挙げるときには、和語「アオ」と意味的に類似性を見せるものに限る。日・韓両語は古くから中国の漢字（色彩語）を取り入れ固有語のように使用しているが、その漢字（色彩語の）の音を借用した場合は両言語で表現的かつ意味的な相違点はそれほど見られなかったからである。

4「青空」といえば、「広くて高い空、晴れた空」を思い出す。天気予報でも、「午前中雨が上がって、午後からは青空が広がります」と言う。「青空」の辞書的意味は、「①青く澄んで見える空　②転じて、野外でする催しの形容」である。したがって、「青空」の「青」からは「晴れる・澄んでいる」というイメージが付いてくると言えよう。

5 イメージスキーマとは、概略、外部世界の知覚、経験の集まりを言う。比喩的用法による意味の概念化（言葉の認識と概念領域の拡張）は、人間の経験の集まりによるものとされている。

6 比喩ル（あるいは、以下の比喩ル心）は、岩田（1988）の表現である。

7 本稿で言う新語とは、比較的近・現代に入ってから使われ始めたと思われる複合語・慣

用表現を指す述語である。

8 この色彩表現は中国の漢文から取り入れられたものである。

9 いつも青々とした松を見てきた韓国民族は、そこから「変わりのない」というイメージを感じ取った。「永遠・不滅」といった情緒は「푸르다」が担うようになっただろう。

10 現代韓国語における日本製漢語の受け入れかたについては、李（1993）に詳しい。

11 車（1990）は、一般的に言われている韓国語における色彩表現の豊かさを日本語のそれと対照分析しているのみで、本研究の目的・方法とはかけ離れているが、これによると、韓国語色彩語は日本語色彩語に比べ、量的には多いが、その色彩語を用いた色彩表現においては、それほど日・韓両語の差を見られなかったとも述べられている。

12 日・韓両国にとって、古くから儒教・仏教などの外来要素が言語的にかつ文化的に生活のなかに浸透してきているということは、否定しがたい事実であろう。しかし、韓国は日本とは違って、なお、儒教の本家とも言える中国にも見られない、色彩語による独自の意味用法を有する。儒教という同じ（あるいは類似した）文化的要素を摂取してきた国（民族）同士という事実こそ、色彩語による比喩的表現の特殊性、また、色彩語に対する価値観の相異性が認められる根拠となるのではなかろうか。

参考文献

李　漢燮（1993）「現代韓国語における日本製漢語」『日本語学』Vol.12.

岩田純一（1988）「『比喩ル』の心」『比喩と理解』東京大学出版会

大山　正（1994）『色彩心理学入門』中央公論社

加藤隆勝/森下由美（1988）「『青年』ということばの由来をめぐって」『心理学研究』11

佐藤喜代治（1977）「『青年』ということば」『岩波講座 日本語月報』9

柴田　武（1982）「現代語の語彙体系」『現代の語彙』明治書院

柴田　武（1988）『語彙論の方法』三省堂

全　몽수（1941）「色彩語彙考」『한글』88~90 합병호

須賀川誠三（1999）『英語色彩語の意味と比喩』成美堂

車　美愛（1990）「韓国語の色彩表現－日本語との比較の観点から－」『名古屋大学言語学論集』6

町　博光（2000）「対照方言語彙論の展開」『方言語彙論の方法』和泉書院

室山敏昭（1998）『生活語彙の構造と地域文化』和泉書院

山口佳紀（1993）「アヲとミドリー平安仮名文学の言語位相－」『古代日本文体史』有精堂

Wyler,S.（1992）*Colour and Language: Colour Terms in English*. Tübingen: Gunter Narr.

拙稿（1999）「日・韓両語の色彩語に関する対照語彙論的研究－『青い』と『푸르다』を中心に－」広島大学大学院修士論文